

平成27年度愛知県がんセンター公開講座(第5回)のご案内

「がんの診断について」

= 平成27年11月8日(日)開催 =

< 講師からのメッセージ >

「顕微鏡で分かるがんの性格」

私たち病理医は、検査や手術で患者さんの体から取り出されたがん細胞を顕微鏡で詳しく観察することによって、がんの性格を調べる病理診断を専門としています。また、特に愛知県がんセンターでは、がん細胞のどの遺伝子に傷がついているかを調べる遺伝子診断を積極的に行っています。病理診断および遺伝子診断は、個々の患者さんにとってのより良い治療法への選択、予後の改善へと繋がります。

今回は、顕微鏡でわかるがんの性格、そして遺伝子診断についてお話ししたいと思います。

遺伝子病理診断部 医長 村上 善子

「肝細胞がんの画像診断と画像誘導下治療」

肝細胞がんは、B型・C型肝炎ウイルス感染やアルコール多飲習慣などを原因とする慢性肝炎・肝硬変から発生してくることが知られています。そういった背景をもとに、肝細胞がんの診断には画像検査が重要であり、その特徴的な画像から確定診断が可能となります。さらに、その画像診断をもとに治療方針が検討されますが、外科的切除以外の治療としては IVR と称せられる画像誘導下に行う局所治療が重要な位置を占めています。肝細胞がんの画像診断から画像誘導下治療（IVR）についてお話しいたします。

放射線診断・IVR部 部長 稲葉 吉隆

「内視鏡でここまで分かる消化管のがん」

胃がん・大腸がんは、2015年のがん罹患数、がん死亡数予測でどちらもワースト3に入る身近ながんですが、早期に発見すれば根治できるがんでもあります。そのため小さな病変をより早く発見することが重要です。近年の内視鏡器機の進歩はめざましく、ハイビジョン化や拡大観察、さらには光デジタルによる画像強調観察により、粘膜表面の血管や構造が強調して映し出され、組織を採取しなくても病理組織像を推定することが可能となりました。本講座では、胃がん・大腸がんの早期発見における内視鏡検査の役割を中心に紹介したいと思います。

内視鏡部 部長 田近 正洋